



祝

2017年7月 東京大学博士号(文学)取得

文聖姫さん(取得時55歳)

【論文テーマ】北朝鮮における経済改革・開放政策と市場化

論文を活かした新書『麦酒とテポドン』で、北朝鮮経済のリアルに迫る

■ジャーナリストが見てきた北朝鮮

日本で報道される北朝鮮情報は、拉致問題や長距離弾道ミサイルなどネガティブなものが多く、経済や人々の暮らしに焦点を当てた情報は少ない。

文聖姫さんは青山学院大学からコリアンコミュニケーション紙に就職し、20年間務めた。主に北朝鮮関係の記事を担当し、1996年と2003年には特派員として北朝鮮の首都・平壤にも滞在した経験を持つ。北朝鮮が日本人拉致を認めるときはシヨックだった。記事を書く中で、ベールに包まれた(と多くの日本人が感じている)北朝鮮の実際の姿を頭にしてみたく、2006年に退社し、2008年、東京大学大学院人文社会系研究科に入学。経済という比較的数値化しやすい領域で学術的にアプローチした。研究を始めてからも4度の訪朝をし、定点観測の結果をハンガリーの経済学者コルナイの指標に照らし、市場システムの発達具合を測定していった。予定より時間はかかったが、博士号を取得した。

特派員として最初に北朝鮮を訪れた1996年は、大水害をきっかけに終戦後最大規模となる飢饉が発生。「苦難の行軍」というスローガンを掲げて乗り越えようとしていた厳しい経済危機の時期だった。それが、2003年、2008年と訪れるに連れて、国民が必要品を入手するために自然発生した「市場」の数も顕著に増えていた。南北融和路線、小泉総理訪朝と一部拉致被害者の帰国、六か国協議などを通して、行きつ戻りつしながらも、諸外国とうまくやっていこうという意志が見て取れた時期と

重なる。

もちろん北朝鮮は統制経済で、そうした市場の発生を望んでいたわけではないが、見て見ぬふりをすることで、市場経済のシステムが根付いていったのではないか。

韓国との南北経済協力や経済特区を進めていた2000年〜2008年は、政府主導の計画経済の枠組みの中ではない、結果的に中国企業や韓国企業の進出を受け入れるなど、市場経済のシステムが浸透しつつあった。

■市場経済への転換が顕在化してきた

博士論文は決して予測の書ではないが、文さんが博士号を取得した2017年の時点では、盛んに核実験や長距離弾道ミサイルの発射実験を海外にアピールしていたにもかかわらず、2018年には明らか



予備論文から一転して、博士論文では序論だけでも10回書き直しをさせられるなど、挫折を何度も味わった。

かに経済を意識した政策に舵を切った。アメリカと対話し、韓国との融和路線を取る金正恩は、非情の独裁者から、案外と良いやつに印象さえ変えてきた。良くも悪くも統制には自信を持つ北朝鮮政府。核や武器に頼らず、経済で他国と交流することで、政府の目指す統制の上に成り立つ市場経済は、意外と早く実現するのではと文さんは見ている。

■ビールで打ち解けて本音を引き出すことも

文さんの周りの若い院生にはけっこう怠けている人もいて、「ちゃんとやりなさい」と叱ったこともあるとか。それに比べて社会人の院生はコツコツと頑張る人が多い。奨学金は得られるが卒業後に月数万円の返済が始まる。返済しなくてよい財団の博士号取得支援事業は経済的にも助かり、励まされた。本事業は後輩から教えられて応募したが、今度は自分なりに教えているのだという。

望んでいた大学教員の席は得られなかったが、バイトだった出版社で正社員になった。「就職に役立たなくても人生のプラスにはなる。みなさんもあきらめず挑戦してほしい」。以前より成長したジャーナリストとして発信したいという。

さっそくだが、先ごろ文さんの著書『麦酒とテポドン』(平凡社新書)が出版された。論文でも評価された、度々の現地取材に基づく北朝鮮を紹介。「経済から読み解く」としながらも、女性のファッション、韓国より美味しいとされるビール、バーやファストフード店など、ベールの向こう側の人々の生きる姿が透けて見えて興味深い。